

私の満州での体験と引揚げについて

中野 幸子(昭和6年生まれ)

私が生まれたのは昭和六年（1931年）の満州事変勃発の年。三才の時、父は仕事の都合で、母と弟と私を連れて現在の中国に渡りました。その後、満州の大連に移り、小学校入学の昭和十二年に日中戦争勃発。十才で、汽車に乗り、ハルビンに移った時には太平洋戦争が始まっていました。ハルビンの女学校に入学はしましたが、まともに勉強する事ができたのは一年生（今の中学一年生）迄で、二年生になると学徒動員で、軍需工場で爆弾作りです。爆薬を袋に入れる作業でした。

また、汽車で数時間の奥地で、北海道から入植された開拓団（※1）の方達の手伝い畑仕事を一か月ほどしました。とは言え、若い働き手達は手伝うどころか逆に貴重な食糧をいただくことになりました。戦争が激化すると挺身看護婦の名目で、戦争で負傷した兵隊さんの手当てができる人間を育てる訓練を受けました。

ソ連が参戦してきた昭和二十年、ハルビンに空襲のおそれがあるとの事。父を残して強制的に奥地に疎開させられることになりました。「国の為には命も投げ出す」教育を受けてきた私は、父と一緒に残って戦う覚悟でしたが、母の説得に負け同行しました。妹が三人生まれていたので、母は子供五人を連れて疎開。そこで終戦を迎えました。

私たちは、再び父のいるハルビンに戻る事になったのですが、その列車が度々銃を持った人に襲われ、何度か停車しながらやっと着くことができました。襲われた理由は、意外にも小麦の入った袋だったそうです。

敗戦後のハルビン市内には、ソ連兵が進駐してきました。道路を足音高く行進している姿に恐怖を感じました、「マダムダワイ（女を連れて行く）！」と叫び、住宅におしかけてくるので、私も頭を坊主にして、息をひそめて過ごしま

した。時には土地の人から石を投げられることもありました。

市内の小学校は奥地から避難してきた開拓団の人たちの避難所になりました。零下二十度を下る寒さの中で毎日人が死んでいき、そのまま外に放置されると聞きました。

その後、治安が維持されたので、小学生だった弟妹は日本人の家庭を廻って大福餅売り、私は腕に着物を何枚もかけて、ソ連兵相手に和服売りをしました。時には家にある日用品をござに並べて売ったりしましたが、大勢に囲まれ品物を持って行かれたこともありました。その代金は帰国の時のためと茶筒に入れ、縁の下にかくしておきました。

父は満州鉄道に勤めていたし、私たちは敗戦後も自宅で生活ができたので幸せでした。日本人学校にも通い、授業を受けることができました。ハルビンの冬は本当に寒く、零下二十度を下回る日もあります。ロシア語で「シューバ」と呼ばれる毛皮のコートや、毛皮の帽子、手袋を持っている人もいました。冬の体育の時間には、屋外に水を撒いて作ったスケート場で、スケートをしたりしました。

敗戦後一年でやっと帰国命令が出され、持ち物は一人リュック一つだけと制限されました。当時私が十四才、第十二才、妹が九才、七才と二才。五人の子供の一家七人でした。食料品もいるのにわずかしか荷物を持っていく事ができません。義勇団（14～18歳の青少年の兵達）で、お金がなく帰国できない人への頼み、帰国の費用を出して荷物を持ってもらいました。

はじめに列車に乗りましたが、屋根のない貨物列車に押し込められ殆んど立ったままの姿勢で幾日もかけて葫蘆島（※2）に着きました。数日たって日本への船に乗りましたが、これは貨物船で、横に一列に寝て身動きができないくらいにつめこまれ、食事は一日二食。アワのおかゆでした。ひもじい思いをしました。

9月にハルビンを出てから四十日かかって、やっと日本の土を踏むことができたのです。長崎の佐世保港に着きました。船から見た日本の緑の美しい景色

に感動しました。家族全員が栄養失調にもならず無事に帰ってこられたのは、
帰国時、大きな丸いチーズを母が用意して皆でけずりながら食べていたのがよ
かったのだと思います。未だにチーズが大好きです。

引揚げ後は親戚の一室を借り、職を失った父を助け、母は数キロの道を魚の
行商をして五人の子供を育ててくれました。父母が戦争の一番の犠牲者だと
思います。

私の学生生活、大半は戦争に翻弄された日々でした。平和のありがたさをかみ
しめています。

※1 開拓団：昭和6（1931）年の満州事変以降、昭和20（1945）年の太平洋戦
争敗戦まで、日本政府が国策として行った移民政策により満州に渡った移
民団。

※2 葫蘆島：中国遼寧省南西部の港湾都市。戦後、満州から日本への引揚げ
船の出発地となった。